

〔法学新報〕第27卷5(308)号 大正6年5月1日

○石坂博士逝去 中央大学講師法学博士石坂音四郎氏は去月八日発熱悪寒を覚え漸次体熱加り遂に実扶的里亜の徴候明と為り十三日杏林堂病院に入院治療したるも兎角熱氣一上一下容易に解消せざりしか是れ全く咽喉部にありたる実扶的里亜菌か血液に混入して繁殖せる為め壞血症と為りたるもの由にて其後十九日青山博士の診察を受け経過稍良好なりしも翌日俄然重態に陥り二十一日午後一時三十分終に逝去せられたり享年四十一、博士は卓越したる民法学者にして日本民法、民法研究等永く後世に伝ふべき好著あり明治四十年岡松博士に代り京都法科大学に教鞭を執り大正四年に至り川名博士の後任として東京法科大学に教授と為り傍ら我中央大学に於ても後進の誘掖に努められ其法学新報、京都法学会雑誌、法学協会雑誌其他に寄せられたる論文は孰れも卓抜なるものにして永く斯界の權威たるを失はざるへし又博士は京都に在任中より岡松博士と共に台湾旧慣調査を命せられ台湾に適用する立法に与り大正二年に草案成り目下法制局に於て審査中なりと云ふ博士の計に接するや何人も且驚き且悼まざるなく其危篤の報天聴に達するや特に従四位に叙せられ二十四日葬儀当日畏き辺にては午前十時侍従子爵海江田幸吉氏を同邸に御差遣白絹二匹の御下賜ありたり葬儀は二十四

日午後二時途中葬列を廢し谷中斎場にて仏式に依り執行せり定刻靈柩は斎場中央正面に安置せられ導師引師読経に次て男一郎氏、親戚石坂音彌太星光飯島喬平井上敬次郎諸氏、友人土方中島岡野岡松松本等各法学博士江藤哲藏永池長治諸氏の焼香ありたるか朝野の諸博士及び法曹諸氏並に中央大学及び帝国大学の学生其他千数百名雨中にも拘はらず葬儀に列したり回顧するに我法学新報と博士とは実に久しき関係あり博士は吾人か其寄稿を迫まるや忙中万障を排して執筆せられたること数ふるに違なく記者か最後に博士の訇咳に接して益を請ひたるは約二个月前なりき當時博士は吾人に誓はれて曰く來る九月よりは稍閑散と為るへければ必ず毎号執筆すへしと是れ吾人か博士との最後の物語なりしなり今にして之を懐ふ感慨更に深きものなくんはあらず学徳世に高き博士の長逝の如きは独り法学界の不幸たるのみならず又実には国家の不幸之より甚しきはなし哀痛曷そ尽きん嗚呼悲哉葬儀に当り中央大学学生総代として小八重氏か靈前に呈したる弔詞左の如し

大正六年四月二十一日法学博士石坂音四郎先生溘逝セラル嗚呼哀哉

先生曩ニ京都帝国大学ヨリ東京帝国大学ニ榮転シ公暇我中央大学ニ於テ民法講座ヲ担任セラル其業ヲ授クルヤ常ニ熱誠以テ指導シ苟モ理義徹底セサレハ已マス同僚之ニ畏服シ学生之ヲ欽仰ス生等永ク先生ノ訇咳ニ接シテ高風ノ感化ヲ望ムコト切ナリシニ何ソ凶ラン昊天弔マス突如先生ヲ奪ヒ生等ヲシテ其抛ル所ヲ失ハシメントハ哲人凋謝シテ典型爰ニ亡ヒ幽明相

隔リテ玄路寂寞タリ嗚呼哀哉茲ニ中央大学学生ヲ代表シ恭ク誄詞ヲ捧ケテ先生ノ英靈ヲ祭ル尚クハ饗ケヨ

大正六年四月二十四日 中央大学学生総代 小八重直三郎